

視覚障害教育における卒業生卒業後の生活を包括的に支援するシステムの検討

自主的な活動の促進と社会への積極的なアプローチを進めるための支援体制の拡幅のために

○刀禰 豊

（岡山東支援学校）

KEY WORDS: 特別支援教育 視覚障害教育 卒業後の全般的な支援体制

（目的）

視覚障害特別支援学校等、視覚障害を負った生徒の卒業後のサポートについては個々人が属する地域、学校等によって様々の支援メニューが用意され、必要に応じて支援がなされている。ただ、個別の事例を見ると、支援の内容が十分な効果をあげていない、支援を求める側のニーズにあっていない事例も見受けられる。今回、当事者団体である「チーム響き」の結成から、現在に至るまでの活動の広がり、経緯を検証する中で、支援を待つのではなく、積極的に支援者側につながりを作ることで、社会への自分たちの思いも積極的に発信するまで至った。

「チーム響き」は岡山県内の視覚障害特別支援学校等のつながりを持った仲間のつながりをもとに卒業後も定期的に連絡等しあう中で自分たちの思いを自分たちで形にしていこうという数名のメンバーの発想をもとに緩やかな卒業生を核とする形で始まった。支援の輪を広げる中で、地域や年齢も多様な、「広い観点で障害者のことを」自分たちの目線で発信していくイベントを開催するようになってきた。アニメーションの分野での声優の方とのコラボで地元の高校生等の参加も募って、障害者の思いを朗読劇として発表するイベントも行っている。NPO 団体として活動を広げる中で多くの支援団体や障害者の団体や個人とも繋がり地域をベースに活動を広げている。

当事者団体として活動を広げていった経緯を検討するなかで、個々の思いを形にしていく当事者たちの思いをグループとしてまとめていくために必要なものはなにかを探っていく。

（方法）

10 年を超える活動実績を持つ自主団体「チーム響き」の活動記録の検証を行うとともに、活動を盛り上げてきたメンバーや活動に加わってきたボランティア、イベント開催時の参加者等へのインタビューの記録やアンケート等の記載事項を検討し、活動の活性化に役立ったと思われる事項について検証、分析する。

（結果）

活動のきっかけとなったメンバー間共通にあげていた意見の中で、①仲間の大切さ、話し合いの場をできる限り多く持つことの大切をあげていた。自分たちの思いをお互いに話し、相手の意見を聞くことで、自分たちの考えを共有し具体的な形にしていこうという気持ちを持つことができたことと述べた意見もあった。間接的ではあるが、在学時に仲間との話し合いの機会を十分持てたことが、結果的には卒業の仲間意識にもつながり、さらに周囲のいろんな人たちに思いを語る時も自信をもって接することができた。また、自分一人では解決できそうにない問題を進んで相談できる場を「チーム響き」に求めることで、職場以外にも仲間がいることで安心できるという状況も彼らにとっては重要な点であった。

また、②自分たちの思いをあきらめず追っていくことで、その一部あっても現実の成果として体験できたという「チ

ーム響き」での活動の中で、自分の思いを積極的に発信していくことの重要性も意識の中に強く持つことができた点をあげている。卒業後の生活の場は個々に多様であるが、思いの底にある共通の思いを持った仲間の意識は常にそれぞれの進路で頑張っていけるよりどころになっていると語り合うこともあるそうである。

さらに、③在学中に経験し、学んでおくべきこととして次のような事項をあげている。(1) 就労等に関する項目はある程度役だったが、広く仲間づくりをする意味での話し合い等の時間はもっと必要ではないかといった意見が多かった。話し合っただけでイベント等をするようになって、同年代の仲間と学校の枠を超えて話等する中で、体験すべきことをしてこなかったことが残念だとか、地域の同じ年齢層の人たちとの交流も在学中にもっと頻繁にやっておけば、地域の生活に馴染むことももっと簡単にできたように思うなどの意見もあった。

過去の学校での経験は、プラスもマイナスもあったが、それをベースにしてメンバー一人一人が自分の取り組むやり方で「チーム響き」という場で互いを高めあいつつ、現在も個々のレベルでの育ちの道を歩んでいる。ライフステージに応じた適切な人間関係を得ることに困難があってもそれに適切な支援があれば自分たちはもっと多くの思いが実現できたのではと語るメンバーも多い。

現状には決して満足しているというわけではないが、現状に向き合っただけで、「チーム響き」というグループの中で思いをまとめていくことのできる場を作ることがすべての変化の一步となった。その意味で、仲間づくりに早くから取り組み、自分たちで活動を進めていく力を作っておくことが大切な要素となっている。

（考察）

視覚障害特別支援学校等を卒業したのちの、就労を含めた支援については、卒業生の進路先や生活拠点の福祉課などの窓口等で現在でも多様な支援が行われているのが現状である。しかし、地域の中に広く支援の輪を広げるためには、必要な支援の展開の際に、当事者がより積極的に関わっていく必要がある。Ecc Essentials (AFB, 2014) では、「余暇の利用」「自己決定」など学校在学時に学習すべきカリキュラムの内容の中でリストをあげている。教科分野での力に加えて、多様な生活の能力の分野でも、学校在学時に指導実践していくことが記述されている。また、卒業後の生活の力につながるものとして関連づけられている。また、個々の生徒は在学中から生徒の発達段階の状況の違いはあるが、自分の思いや考えを持っている。大切なのは、そのような課題に応じた支援の手が、生徒のライフステージに応じて、加えられることが大切である。

（文献）

Carol B. Allman (Editor), Sandra Lewis (Editor) (2014) ,Ecc Essentials ,AFB

(YUTAKA Tone)